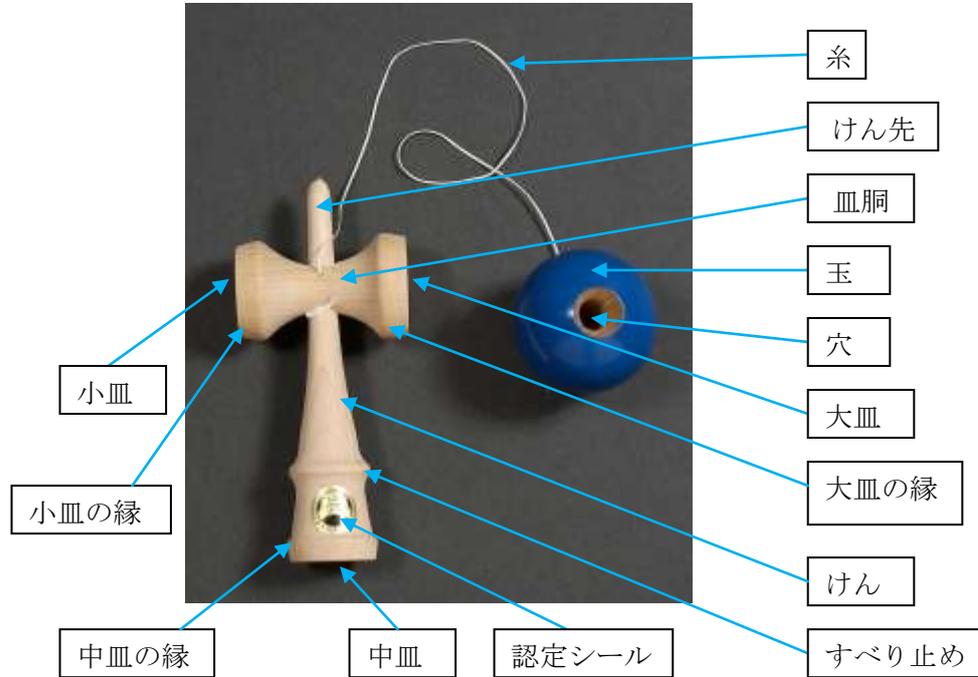
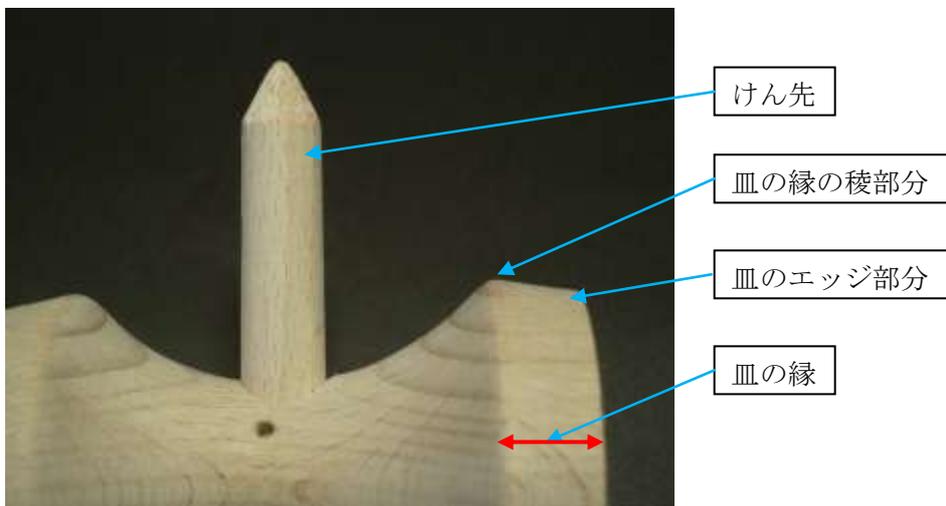


1, けん玉各部の名称

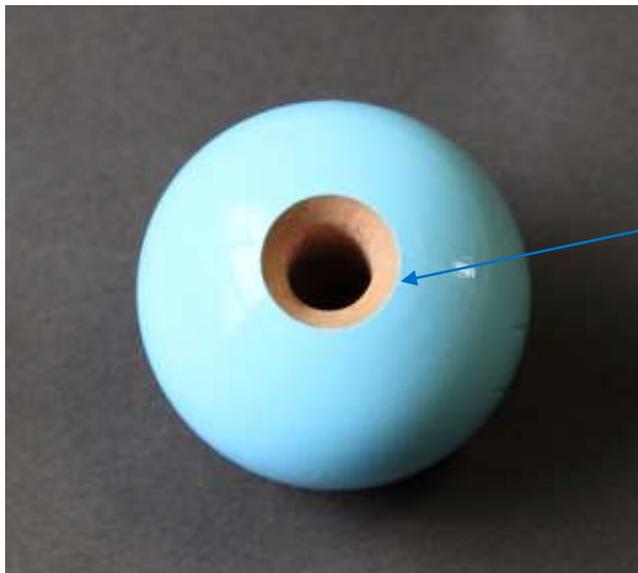
①けん玉各部名称



②けん先、皿各部の名称詳細



③玉の穴の縁



玉の穴の縁

④糸の標準的な取り付け方

右手でけんを持つ場合（右利き）は、けん先を上に向け大皿を手前に向けた状態で、皿胴の左側の糸穴から糸を出し玉を連結する。左手でけんを持つ場合（左利き）は皿胴の右側の糸穴から糸を出し玉を連結する。



右利きの場合の糸の取り付け方の例



左利きの場合の糸の取り付け方の例

2、玉の穴にけん先が入る技（とめけん、日本一周、飛行機、はねけん等）

「玉の穴にけん先が完全に入った状態」「けん先が玉の穴に完全に入った状態」を示す写真



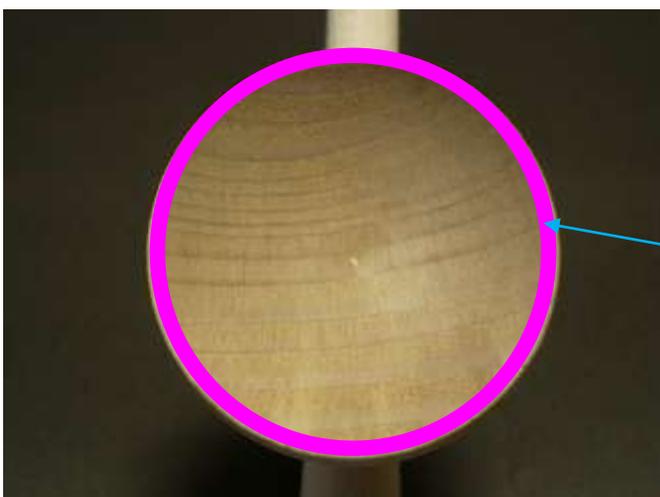
「玉の穴にけん先が完全に入った状態」

「けん先が玉の穴に完全に入った状態」

技の説明の便宜上、とめけん等のけんを持つ技で「玉の穴にけん先が入った」状態と飛行機等の玉を持つ技で「けん先が玉の穴に入った」状態の表現を区別している。

3、玉を皿に乗せる技、皿を玉に乗せる技（大皿、灯台等）

玉が正しく皿に接触する－「皿の面の外周が全て玉に接触すること」とは下記に示す「皿の面の外周」が全て玉に接触していること。



皿の面の外周

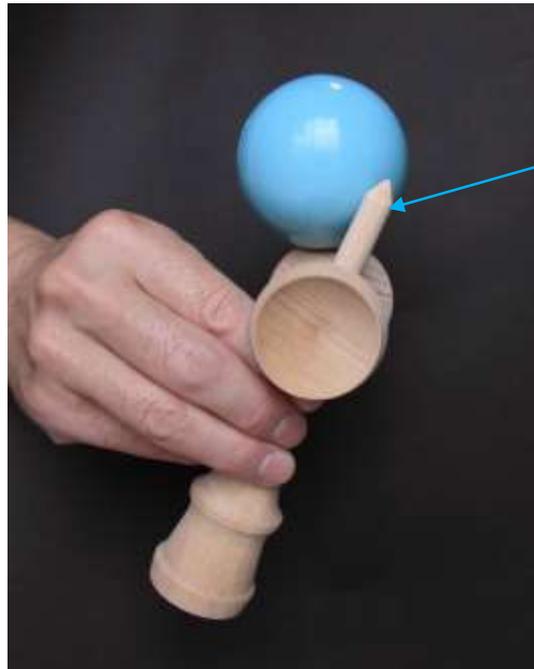
4, うぐいすを行う技（うぐいす、うぐいすの谷渡り）における玉とけん位置関係

玉の穴の縁が皿の縁に正しく接触（皿の縁の稜部分と皿のエッジ部分が玉の穴の縁に接触する）し、かつけん先に玉が接触すること。

ただし、けん先と玉の接触が見られない場合でも、玉がけん先に触れることが可能な位置関係、すなわち、演技者の正面（演技者の反対側に向いている皿側）から見た時、「けん先と玉が重なる位置関係」にあること。

①けんと玉の位置関係

・「けん先と玉が重なる位置関係」



けん先と玉が重なっている

「けん先と玉が重なっている状態」

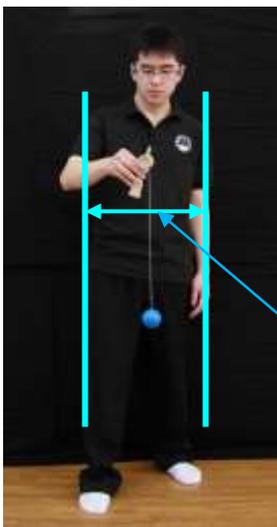


けん先と玉が重なっていない

「けん先と玉が重なっていない状態」

5, うらふりによる技 (うらふりけん)

- けん又は玉の一部でも肩幅の範囲から外に出てはならない
- 成功の瞬間、正面の審査員に玉の穴が確認できること
- 「肩幅の範囲」
- 「成功の瞬間、正面の審査員に玉の穴が確認できること」



玉の穴が確認できること

肩幅の範囲



6, けん先すべりによる技 (けん先すべり)

玉が「けん先と皿胴」に乗った時、及び玉の穴にけん先が入る直前まで、少なくともけんの先端側の穴の縁にけん先が接触していること。



けんの先端側の穴の縁がけん先に接触していること

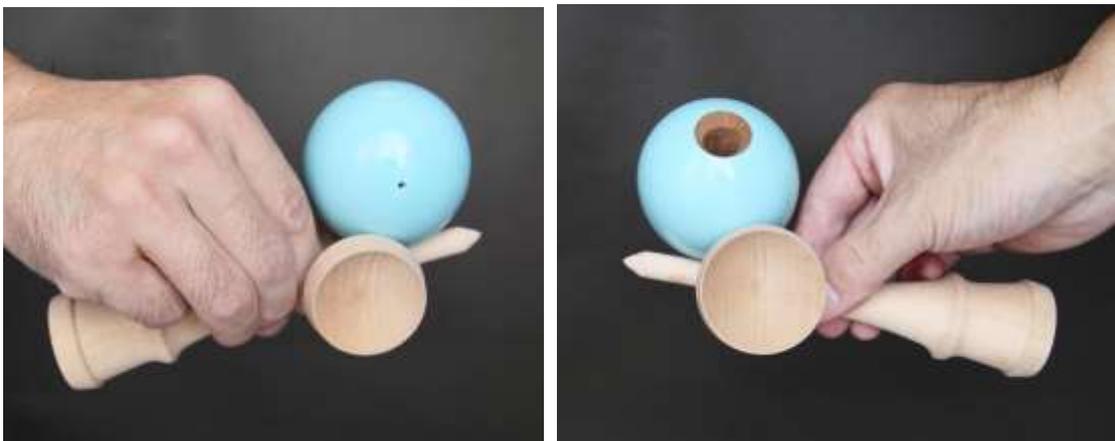


けん先すべり
玉が「けん先と皿胴」に乗った状態
穴の縁はけん先に接している



うらけん先すべり
玉が「けん先と皿胴」に乗った状態
穴の縁はけん先に接している

参考



宇宙一周の場合に玉が「けん先と皿胴」に乗った状態の例

宇宙一周の場合、玉が「けん先と皿胴」に乗った時、玉の穴の縁がけん先に接していない状態或いは接している状態どちらでも可とする。ただし宇宙一周では「けん先と皿胴」に玉を乗せた後、けん先すべりの状態で玉の穴にけん先を入れてはならない。

7, けん玉の持ち方

①「大皿（小皿・中皿）の持ち方」

- ・大皿（中皿）に玉を乗せる時は、中皿を上、大皿を手前に向け、親指と人さし指でけんの皿胴の直ぐ上（中皿側）の部分を持つ。このとき親指を大皿側にしてけんを持ち、残りの中指、薬指を小皿に添える様にする（小指は必要に応じて小皿に添える）。
- ・小皿に玉を乗せる時は、小皿を手前に向け、親指を小皿側にして大皿に玉を乗せる時と同様の方法でけんを持つ。



大皿の持ち方

*大皿の持ち方に準じる持ち方

はやて中皿など持ち替えがある技で、持ち替え後にけんをつかみ皿に玉を乗せる場合、けんを指先だけでなく手の平まで使ってけんを持つことも可とする。このとき皿胴をつかまないこと。



「大皿の持ち方に準じる持ち方」の例

②「ろうそくの持ち方」

- 中皿を上、小皿又は大皿を手前に向け、親指、人さし指、中指でけん先を持ち、薬指、小指は必要に応じてけん先に添える。このとき親指を手前側にしてけん先を持つこと。
- 玉を連結する糸はけんを持つ手の反対側の皿胴の糸穴から出ていること。



ろうそくの持ち方

③「とめけんの持ち方」

- けん先を上、大皿又は小皿を手前に向け、親指と人さし指でけんの皿胴の直ぐ下（中皿方向）部分を持つ。このとき親指を手前側にしてけんを持ち、残りの中指、薬指、小指は必要に応じてけん上添える。
- 玉を連結する糸はけんを持つ手の反対側の皿胴の糸穴から出ていること。



とめけんの持ち方

*とめけんの持ち方に準じる持ち方

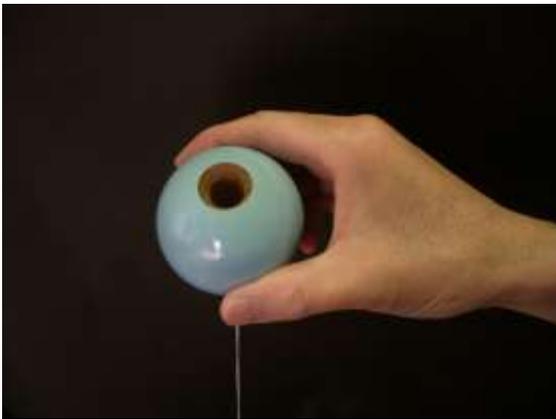
つるし技など持ち替えがある技で、持ち替え後にけんをつかみ玉の穴にけん先を入れる場合又は大皿、小皿、中皿に玉を乗せる場合、けんを指先だけでなく手の平まで使ってけんを持つことも可とする。このとき皿胴をつかまないこと。



「とめけんの持ち方に準じる持ち方」の例

④「玉の持ち方」

- ・玉の穴を上側にして、親指と人さし指で玉の一番太い部分の付近を持ち、残りの中指、薬指、小指は必要に応じて玉に添える。



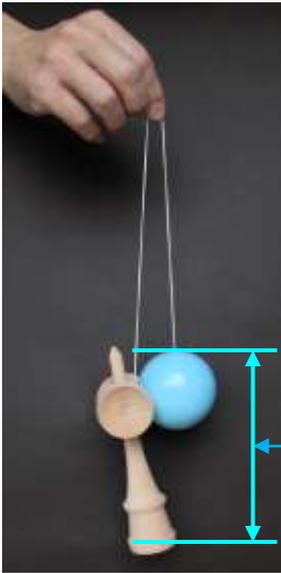
玉の持ち方

⑤「つるし技の持ち方」

- ・糸の中程を親指と人さし指又は中指でつまみ、けん玉をつるして持つこと。
- ・つるした時、糸に指を掛けてはならない。また、糸を余らせてつまんではならない
- ・つるした時、玉の中心が「けん先端と中皿の縁」の間の範囲にあること



つるし技の持ち方



左の写真はつるしとめけん等(つるしの状態からけんを持つ技)を行う時の持ち方を示す。

つるし一回転飛行機等(つるしの状態から玉を持つ技)を行う時は左の写真に対してけんと玉の位置を入れ替えて糸を持つ。

けん玉をつるした時、玉の中心が「けん先端と中皿のふち」の間の範囲にあること。

⑥「極意技の持ち方」

- ・けん先を手のひら側にし、糸の出ている側の皿胴を下にして片手でけんの小皿と大皿を挟む様を持つ。
- ・けん先に手が触れても良いが皿胴より中皿側のけんに触れてはならない。

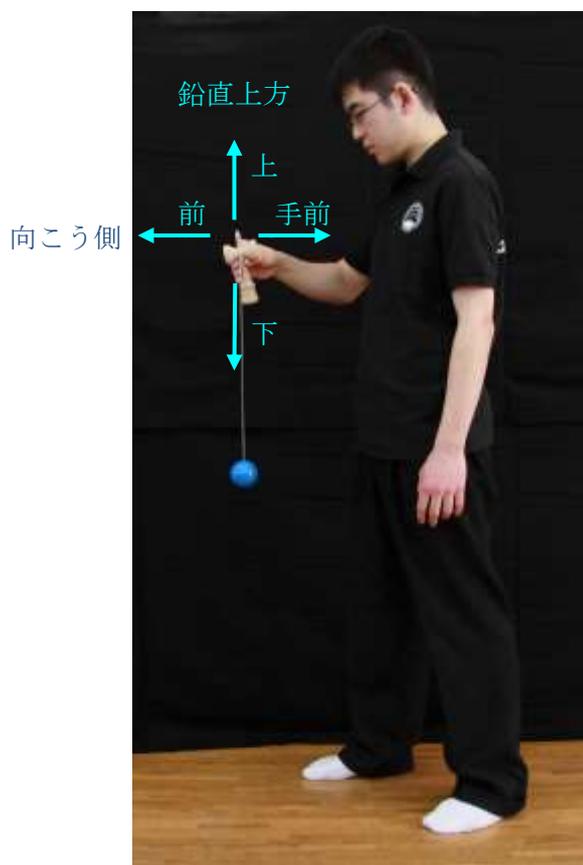


極意技の持ち方



すべり止め極意

8、動作の方向を示す表現



以上

平成24年5月5日 制定